

Title	因果物語試論
Sub Title	Some new light on Inga-Monogatari
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1964
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.17, (1964. 2) ,p.13- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00170001-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

因果物語試論

檜 谷 昭 彦

一

元禄九年刊「石平道人行業記」の附録に「石平道人行業記弁疑」がある。鈴木正三の弟子恵中の編述に成るもので正三の伝記を見る上に欠くことの出来ぬ資料とされている。この「弁疑」のなかに次の一節がある。

問 師、何の爲にして、業報靈附の事を聞見する事有る毎に、必ず以て筭記するや。

答 此れ其の事を現証して、以て衆生をして、必ず因果業讎、此の如きの事を怖畏して、菩提を索むるに庶からしめんが爲なり。正にこれ慈悲心中より流出せり。⁽¹⁾

「因果物語」は右の趣旨から生まれたものとまず看做し得るが、そこには仏法唱導と怪異譚とが意外な程に密着している当代の時流も考えねばならない。⁽²⁾慶安元年以降の江戸における鈴木正三の周囲が、夜話の形で種々の怪談を語り合った様子は「驢鞍橋」(万治三

刊)などにかがわれる所である。僧侶の口を通して談義を目的とした怪異譚が流布して行く過程もここに見られるようである。

鈴木正三(一五七九—一六五五)は三河の人、父重次、弟重成と共に大坂陣に出陣し、家康、秀忠に仕えたが元和六年(一六二〇)四二才の折、江戸にて致仕剃髪して諸国を遍歴、慶安元年(一六四八)以後江戸にとどまって仏法を唱導した。三河は元来浄土宗が深く滲透していた所だが、三河遠江は、大洞院を中心とする曹洞禪が近世に至って大きく伸びて来ていたし、一向一揆による苦い経験以後家康の旗本で仏教に帰依するものの中には、禪に参ずるものも少なくなかったようである。「行業記」に、

寛永元年甲子、居を石平の幽谷に見て、茅を結び、蘆を構へて、弁道慥々爾たり。諸方の雲衲、遠近の男女、靡然として風に嚮ひ、翁如として筵に競ふ。問法求道、悉く開明ならずと云ことなし。

とあるのは、やや誇張したきらいはあるが、三河岡崎城を北に去る事五里の地に庵を結んだ正三の宗派は、「先祖已来曹洞禪門に帰す、殊に洞上の密修を信すること、至って深し。」(行業記弁疑)とある如く、密々参じて因果を信ぜんとする禪宗であったこと言を俟たない。かかる正三の在り方には、一般的な僧侶の概念では律し切れぬ所がある。

久松潜一博士は近世文学の流れのなかに、隠者文学の系統を引く作家・文人の系列を考えられ、そうした作家・文人を「近世では隠者に対して隠士・崎人とよばれている場合が多い。隠士とよばれるのはかつては武士であった家柄のものが武家の封禄を離れ、現実の社会と離れて隠遁的な生き方をする所から名づけられたのであろうか。」³⁾と述べられ、更に、「その生き方は俗社会の塵にまみれず、現世においては隠遁的生活を送っている。そうして創作と言っても歌人、連歌師、俳人として立ち、もしくは学問の研究に入っている。この場合隠士においては創作も学問も同じ態度でなされるのである。」と説いておられる。

久松博士は契沖の場合を以て説かれたので豊臣氏の録を食んで居った武士が、関ヶ原以後徳川氏の政權下に職を失ない又自ら浪人して隠士となったものと考えられたのであるが、鈴木正三は家康幕下の譜代として勇名を馳せた武士であるから、自ら時勢に失望したというのとは異なっている。にも拘らず出家して参禅した所に、更に数多の著述を以て知られている所に、彼を隠士と目する一の所以

があるのである。

「石平道人四相」（写本、延宝四成）の「外縁相」の冒頭に、

師は、三州足助庄の英産、天正七年己卯に生る。父は、穂積の姓鈴木氏重次なり。此重次の先祖善阿弥と云人、文治の比、由有て、紀州藤代を出て、三州高橋庄矢並村に住す。善阿弥の子孫、栄にして後皆松平の幕下に属す。

とある。この先祖の善阿弥は鈴木重善というが、寛永三年に鈴木正三は三河矢並村の医王寺を再興して、祖善阿弥を弔っている。これが後の石平山恩真寺である。このことを敍した「行業記」に対して、「行業記弁疑」に次の記事がある。

問 医王寺は善阿弥の故蹟なりと、此れ出家なりや。

答 然らず、老年の隠士なり。其の居を、後改めて醫王寺と成す。所以に師、其の廃寺を修葺して之を興造し玉ふなり。（傍点筆者）

もとより正三の伝記面での考察は、特にその系譜と、先祖の宗派の両面に亘って多岐にわたる調査が必要とせられている。医王寺そのものの宗旨にしても善阿弥の号にしても、ただちにそれらを正三に結びつけることには多くの危惧もある。恵中が善阿弥を目して隠士なりと語った意識は、師正三の祖を賞揚せんとする態のものであって、ただしく隠士の概念に照して言ったものとは思われない。ただここでは、鈴木正三の隠士たる所以の一つの例証として考えておきたいだけである。

鈴木正三は、この例からもわかる如く、隠士善阿弥の子孫として、自らも又隠士たる事に深い自負を有していたに違いない。謂わば彼は、その意味からも近世文学に於ける仮名草子作家としての資格の一つを有していた。

正三が「因果物語」の原形ともいふべきさまざまな怪異譚を、聞書として集め始めたのは、「石平道人行業記」によれば寛永四年四九才の頃からである。遠山氏某が沈痾に侵されて苦んでいたが、正三の修法によって治癒した。正三は「是れ夙業の報ふ所、又先世怨親の精霊来て祟を為す」と語ったという。文は続けて、「蓋し業報を転録し、靈府を壞斥すること、中絶の後、師に至って行はるる者なり。師又よのつね業報靈府の事を聞見する事ある毎に、悉くこれを筆記せり。後に三子編輯し、号して「因果物語と曰ふ。」とある。

「因果物語」の片カナ本が刊行されたのは寛文元年（一六六一）であるから、片カナ本の刊行迄には三十四年経っている事になる。「盲安杖」（慶安四刊）などに較べて、正三の生前に出板の意志が全くなかったことを考えると、これはもと談義のために輯録したものであり、仮りに怪異譚を借り用いて仏法を唱導せんがための種本であったかとする中村幸彦氏の推定も充分うなずけるのである。⁽⁴⁾

ところで「因果物語」に就ては、片カナ本と平かな本の二種類があり、その相互関係及び成立の事情などに関して、さきに論じたのでここには触れない。⁽⁵⁾ 私がこの点について述べた際、論の展開上触れられなかった問題がひとつある。それは、片カナ本の「因果物語」に於て、その序文の筆者である雲歩和尚が平かな本の「因果物語」と考えられる書物を指して「邪本」ときめつけている点である。これには吉田幸一博士もいち早く試論を提出されたが、⁽⁶⁾ 私の考える点とは重復しない。以下に於て先ずこの点から論を進めてみる。片カナ本の序文に於て雲歩が言わんとする所は左のようである。

「因果物語」は、「只今現在スル人ノ仮名コレアルヲモテノ故ニ、門人堅ク秘シテ世ニ出ダサズ」という種のものであったが、このごろこれを犯すものがあり、ひそかに写し取つてみだりに板行している状態である。「剩エ私ニ序文ヲナシ恣ニ他ノ物語ヲ雜入シテ人ヲ瞞スル事少ナカラズ、斯ニ於テ弟子等止ムコトヲ得ズ師ノ正本ヲ以テ梓ニ鏤バメ、邪本ノ惑ヲ破ラント欲ス」（傍点筆者）というわけである。

ここで雲歩が言っている邪本とは何か。少くとも片カナ本「因果物語」の刊行以前に世に流布している「因果物語」でなくてはならぬ。それが平かな本の「因果物語」と目されることについてはまえの論文に述べた通りである。一例を示せば、片カナ本の刊行より二年前に刊行を見た「驢鞍橋」（万治三刊）には、すでに「因果物語」が世上に流布しているという記事がある。更に平かな本の序文と大同小異の文章もある。唯、私には現存の平かな本六卷六冊の形が、当時のものの儘であるとは考えられない。その事情についても繰

返しになるから避ける事にする。

さて片カナ本「因果物語」は師正三の正本をもとにして出来たという自負を有している。本書は三卷七章から成るが、一章のうちに平均三話ほどの説話を収めてあるから集録説話総数は七七章の約三倍になる。一章の内にかくつかの説話を収める方法は、同一素材の話を一つに集めて、それによって因果の道理を説く際に、繰返し繰返し強調しようとする仏法教誡の態度に直接つながっている。平かな本の方が、師正三の集めた聞書集を勝手に写し取って再構成して成ったものとするならば、これは、あく迄も仏教唱導の立場から、怪異譚の形を借りて因果の理を説き示すことを目的として、その意図に副った編纂から生まれたものとみる事が出来るのである。

一方平かな本はどうか。この考察の前に断っておかねばならない点は、平かな本が前半三卷と後半三卷に分かれることであって、片カナ本刊行以前に成立していたものは、この前半三卷のみのものであつたろうと推定である。詳しくはこれも拙稿を参照せられたい。この平かな本の前半三卷に収められてある説話を、片カナ本のそれと比較すると、片カナ本の一章中二話迄が平かな本と同一であつたり、又全く片カナ本の説話と重ならぬ章があつたりして、編纂の意図に一貫したものが認められ得ぬのである。今ここでは、片カナ本が正三の正本を忠実に編輯したという序文を信用して、片カナ本の現在ある形から祖本を見ようとしているわけであるから、正三の正本の所収説話から、恣意的に抽出して成つた平かな本の構成を、片カナ本を通して考察しているわけである。そしてこの平かな本の編輯態度は、片カナ本の原型と目される正三の草稿（正本）を写し取る際に、仏教唱導という目的ではなくて、それ以前の意識、つまり読者に何がしかの興味をひきおこすような種の「はなし」を選び集めようという態度だったのでないかと思われるのである。左に一例を挙げてみる。ここには説話そのものの語り方に片カナ本・平かな本、両者の差違が著しくみられはしないであらう。要は説話そのものの内容にあつたのである。

片カナ本・下巻・一五

死後犬ト成僧ノ事

平かな本・卷三・一八

伝賀と云僧死して狗に生れし事

尾州名古屋。膳徳寺、順的和尚ノ弟子ニ。伝可ト云僧有。関東ニテ十年程偏參スル也。後ニ三州牛窪ト云村ニ。寺ヲ持居タリ。順的和尚ノ師匠。牛窪ノ花居寺ト云寺ニ居玉。去年ノ春師匠見舞ニ來給エバ。伝可順的和尚エ向テ。我等參納所仕ベシ。秋中ニ名古屋エ參可ト約束ス。然ニ伝可夏中ニ煩テ死ス。或夜順的和尚ノ夢ニ。伝可來テ云ハ。秋中參ヘシト御約束仕処ニ。夏中相果忽チ犬ニ生申也。何國ニモ縁ナク居処モナキ間。是ノ庭ニヲキ養下サレヨト告ル也。和尚折角待ケルニ扱ハ死テ犬ニ成タルガ。不便ナリ置ベシト言給ト。夢ハ醒ケリ。明朝大衆ニ。不思議ノ夢ヲ見タリト語り玉。亦次ノ夜夢ニ。右ノ如來テ云。和尚扱々クトヒコト、宣テ夢サメケリ。明朝乞食犬ノ子ヲ。一疋連來ヨヒ犬ノ子進セント云。僧達見テ犬ワ入ズ。持去ト云フ。和尚聞玉。夫ワ夢ニ見タル伝可ト云我弟子也トテ。取。庫裡ニ置食ヲ喰セ。和尚茶ノ間ヨリ。伝可ト喚給エバ。彼犬コロト走リ。和尚ノ側エ往也。犬ノ毛ハウス赤。手白鼻ノ先白シト也。扱十三年目ニ膳徳寺ニ江湖アリ。大衆放參ノ陀羅尼ヲ誦玉エバ。彼犬ヲ縁上リ。ワシノト経ヲ誦シナリ。僧達ヲ見テハ只モノ。涙ヲ流セシト也。江湖ハ寛永五年ノ夏也。其江湖ニ本秀和尚居。直ニ見タリト語玉也。 (古典文庫本)

尾州名古屋の善篤寺。順的和尚の同行に。伝可と云僧あり。遍十參年あまりして。三川の花井寺の末寺に住せしが。ある時順的和尚。花井寺へ行給ひしとき。かの伝可いふやう。名古屋の寺家にめし帰し給はれ。納所役などいたして。居申たきとなげき申ければ。さらはともかくも仰あり。しかるにいくほとなく。伝可わづらひ付てつるに三河にて死す。卅歳ばかり也。ある時順的和尚の夢に。伝可來りて申すやう。我はいぬに成たり。此御寺へまゐり度侍り。御庭狗になされて飼たすけて給はれと也。和尚は夢ぞと思ひすて給へは。次の夜又來りて夢に見えて。前夜のことくに申す。和尚ふしきに思ひ。來ることをゆるし給ふ。其次の日中風氣なる乞食。めんつうに古きつづりをしきて。あか狗の手白なるを入て持來る。和尚夢中にうけあひたる故に。飼をかれ。すなはち。名を伝可とつけてよびけり。寺家衆も子細をきいてあはれみ食をあたへけり。手を出せよといへは。両の手を出しうくる事人の物をうくるかことくにしてなみだをながす。鐘をつけば鐘と同音にはゆる。大衆經陀羅尼をよめば。經に合せてはゆる。なに事も人のことくして。十年ばかり過て。寛永五年に死す。近き比の事なれば人よくしりてかくれなし (東洋文庫岩崎文庫旧藏本)

以上のわずか一例を以て事をはかるのは如何かと思つが紙幅の関係もあつて他は略に従う。下段平かな本の文中に傍線を加えた個処あたりに、謂うならば平かな本の、片カナ本と異なる性格があらわれている。怪異奇談を語ろうとする態度である。怪異そのみを、興にまかせて語ろうとする態度である。上段片カナ本のそれと比較してみれば、平かな本の物語意識が分明とならう。

この例に引いた片カナ本下巻は二一章を有しているが、この内平かな本の説話と共通する話は二四篇である。平かな本と共通説話を有する片カナ下巻の各章の数字を挙げればそれらは次の如くであつて先きにも述べた如く片カナ本から恣意的に集録したかのような印象しか与えない。

片カナ本下巻一(二説話)、二、三、四、五、六(二説話)、七、八、九、一〇(二説話)、一一、一二、一三、一五(二説話なるも片カナ本の一つの話より二つの説話を作っている)、一六(一五と同様)、一七、一九(一五・一六の場合と同様)、二〇

かくして一四、一八、二一の各章からは全然説話がとられていない。二説話が含まれているというのは、前述したように、片カナ本は一章のもとに数篇の説話が集められている故、その二説話がそれぞれ平かな本と共通する意味であり、一五、一六、一九の各章の場合、一章中の数種の説話の内一話のみを平かな本で二つの説話に分け用いている謂である。こうした事實は他の巻にあつても同様であつて両者の共通説話そのものからは、何の問題も生じては来ないのである。(古典文庫解題参照)それは平かな本の編輯者が、興味本位に原因物語から説話を抽出したという推定を逆にささえる事になりはしないだろうか。

三

「石平道人行業記」や「驢鞍橋」は、正三の弟子の一人である恵中が編したものである。「海上物語」も「因果小編」も彼の作と考えて間違ひなからう。この恵中と、片カナ本の序文を書いた雲歩とはお互いに因縁浅からぬ仲である。両者は同年(慶安四)に正三の門に入っている。年令も同じである。所がその態度は全く反対であつて、恵中は以上のように甚だ著述が多いが雲歩は殆ど何も残していない。もう一度「行業記弁疑」の記事をして言わしむれば次のようである。

雲歩は豊前の英産、幼にして肥陽に来る。野衲(恵中のこと―筆者注)は肥後の生縁、相ひ階に十歳にして、本郡流長院囲岩禪師に謁す。行年十三にして、同日に剃染し、十有九にして、ともに起つて坂東に臻り、叢林を経る事、已に三霜、終に俱に世僧の学を辞して、石平和尚に参ずるなり。

つまり両名はその出発を全く一にしていたわけである。ところが師正三滅後の両者は行を共にしていない。「行業記」の方の末尾は両者の足跡をかく伝える。

雲歩は師の滅後、豊後州に適て、能仁寺を闢き、肥の後州に徒て、天福寺を創し、以て師法を弘播す。野衲は大府に在り、草菴に窮居して、機を覚めて、法の久住をはかり、縁を得て、師の念願を達せん事を希冀きやうのみ。

雲歩は黙して語らず、禪門の正道を歩んで師法の弘播をこころがけた。恵中は数多くの著述をし、正三を世に喧伝させ、正三遺稿の出版迄手がけたようである。片カナ本の序文は雲歩の文章である。邪本呼ばわりは平かな本に向けられて居る。平かな本の序文と、恵中の「驢鞍橋」の文章との親近性もある。片カナ本と平かな本の性格の違いは、雲歩と恵中の差でもあるだろうか。平かな本恵中作者説を捨て切れないゆえんの一つが此処にある。

由来近世の怪異小説は、巷間に散らばる怪異奇談の類を、まさに興味本位の筆で編集し、世の慰草として読者に供しようとする所に本来の目的があったと考えられる。少くとも当時の時流としてそれが認められるという事だ。鈴木正三が、志怪の話を見聞する毎に書留めたというその一事を以てしても、その理由付けはともあれ、まず怪異譚を好む文人として、隠士としての正三の一面がうかがわれるのである。そうして集められた謂わば「原因果物語」とも言うべき草稿から、怪異小説乃至は諸国物語としての、読者の興味を誘う説話ばかりを、その点では興味本位の編輯意図を以て写し取ったものが平かな本因果物語(前半三卷)であったと考えるのである。

片カナ本はその態度を難詰した。「邪本」と呼んだわけである。だが時流はむしろ邪本呼ばわりをされた平かな本の方に傾いている。片カナ本の鹿爪らしい態度を和らげ、所々の「はなし」の構成を按配し、仏教臭を希薄にした上に、挿絵を加え、かなに書改めて

板行すればこれはもう仮名草子である。世上に流布して板を重ねた。時流に投じて六巻本の増補板をも出した事はすでに説いた所である。⁷⁾片カナ本の編者雲歩が邪本呼ばわりをするのも故なしとせぬのである。

四

かくして平かな本に於ける編者の意図は、あく迄も時流に投ずる事ではあつた。一方片カナ本に於ける雲歩の意図は、あく迄も正三の師説——仏教の因果の理を説く事にあつた。態度としての正否が問題になるのではない。雲歩の場合はその意図と世間の享受とが喰違つたのである。自らを正本と自負し、作品も又それに即応して因果の理を繰返し展開しているにも拘らず、この雲歩の意図は、近世初期の怪異小説の世界にあつては全くかえり見られなかつた。否、当然顧みられなかつた。それは別段雲歩にとって不幸ではない。唯、後続の怪異小説は、この片カナ本因果物語をも、素材の宝庫の一つとして看做して行くようになるのである。たとえば次の例がある。

中巻・九 鳩ノ愛執之事

寛永十年ノ比。去家中伴ノ市右衛門ト云人ノ庭ニ、鳩来ヲ則チ鉄鉋ニテ打殺ス。頸ニ当テ頭ナシ。其後又鳩来。是ヲモ前ノ如ク打チ。毛ヲムシラスルニ。脇ノ下ニ鳩ノ額ヲ挾テ有。日数ヲ計ルニ。今日ハ先月鳩ヲ打タル日也。是ヨリ驚テ殺生ヲ休ケリ。市右衛門傍輩衆慥ニ語ル也

この咄のあとには、「母鳥子之命ニ替事付猿寺エ来子ノ吊ヲ頼事」なる章があつて、鷹におそわれた雲雀の子を助けようとする母鳥の咄を、又、出産近い猿が、無慈悲な猿廻しの為にやがて産まれた子猿を死なせて歎く咄を伝えているし、一章は「鶏寺入スル事」という題の咄を、二二章は「鯨人ノ夢ニ告テ命ヲ乞事付牛夢中ニ命ノ礼ヲ云事」なる題を有し、それぞれが畜生と云えども慈悲恩愛に報い無道心にたたりを為すという態の因果譚を語っているのである。つまりこのように、同じ型の咄をひとまとめに集めて因果の理を

語る態度は、諸図の奇談珍談を読者に供する態度ではない。これはあく迄も片カナ本の序文に忠実な仏教の撰理に拠った態度と見なくてはならない。次期の仮名草子はこの態度を放棄したのである。其処に最も根本的な性格の相違があるのである。

さて、片カナ本「鳩ノ愛執之事」なる話は、「新御伽婢子」（天和三刊）の巻二の九「鷹塚の昔」に次のように拡大されて用いられてある。長文ゆえ中途を二カ所略した。

河内国或里に地下侍有て常に朋友を集め囲碁双六に好狩漁を業となんしけり或時又碁を始めて千手百手にいどみ戦折節窓のむかふ半町斗の田の畔に水底に書をうつして白鷹ふたつおりたつ侍早く見附頓而床なる弓おつ取鷹僕の矢をつがひ引しほりて放つあやまたず雄のほそくびに射つけたり雌は是に驚きて跡なく飛去ぬ走行て見るに首は射切てなく成しをさのみも尋ず引提て帰りまさしく料理て饗応し己食しつくしけり（中略）漸にして文月にはかり八月になる去年の此比を思へは誠に向の田の畔に鷹の渡りし事ありと其かたを見やりければ又鳥ひとつおり立ぬ噴願所よと弓取り矢つがひ心せきて切てはなつ思ふ凶に射附て是をも得たりみれば白鷹の雌なるが羽がひの下に雄の首を懐たり侍驚涙をながし日を指折て思へは去年の今日雄の首を射切たるが其雌雄の別れを悲しみ此首を身に添永き月日のけふ迄猶其事に浮岩此所には落たるるなべし（中略）目下哀を見て身の罪しらぬはかなさよと慚愧の心切なれば是なん菩提の知識なるべしと一所の所帯を沾却し髻切てながく仏道修行の道人となりしがかの田の畔を買求てひとつの塚を筑き卒都婆を建一鳥の跡ねんに比に吊けり俗呼で鷹塚といふ今に古跡をのこしぬ（後略）

片カナ本を素材とし、鳩を鷹に代えて成ったこの「新御伽婢子」の構成はその基本線を片カナ本のそれと全く一にしていることがわかるであろう。かかる形式の素材の提供は、中巻二三の「幽霊来テ子ヲ産事」が、「御伽物語」の巻三の一「卒都婆の子うむ事」なる章に於て用いられている所にも見られるし、下巻の一八「女の魂蛇ト成夫ヲ守ル事」なる章は三つの説話を合む章であるが、それらは「奇異雑談集」巻二の四「高野の鍛冶火をもって蛇の額に点ずれば妻の額に瘡いできし事」なる説話に関連を有して居り、更に「御伽物語」巻三の一「幽霊偽りし男を睨ころす事」に連なり、更にそこから「西鶴諸国はなし」巻二の「水筋のぬけ道」に関連して行く

という形で、素材の提供がみられるのである。

とは言うものの近世怪異小説への説話の提供の経路は、矢張り平かな本「因果物語」が主流である事に違いない。平かな本の二行本は更に一二行本を生み、又「諸国因果物語」が生まれた事も古典文庫の複製等を通して知られる通りである。宝永四年には白梅園鷲水の編になる「諸国因果物語」六卷六冊も板行された。

古典文庫に収められた一冊本の「諸国因果物語」は、平かな本からその一八話を抄出したものである事は吉田幸一氏の解題にある通りである。うち巻四から三話を、巻五から二話を採っている点も、平かな本の傾向を押し進めたもので、片カナ本の態度を無視している編輯態度がうかがえよう。

五

最後に、平かな本因果物語の後半三卷は、各巻七―九篇程のわずかな説話から成っているが、私は前年三巻迄の平かな本が先ず成立し、次に片カナ本が成って、それと平行するかやや後れて後半三巻を附した現在見られる形の平かな本が出版されたという推定を有している。この後半の三巻の説話をみると、第一に、前半三巻の記述の際に見られる末尾の常套語「……和尚髓に見たる話なり」式の聞き書を装うことはがなく、多くは世間の一般人の聞き書になっている。第二に、はなしそのものの内容に、所謂因果の理を含んでいない話の類が混入して来ている。換言すれば怪異そのものを語る事に「はなし」の重点がより強く傾いていると言った方がよい。巻六の五「狐産婦の幽霊に妖たる事」や七の「石仏のばけたる事」などは、そうした例の典型であろう。そうして第三にはなしの構成がより立体的になっている。仏教的な教戒を主として因果を説くという点からの、素朴で平板な咄の在り方が失われて、奇異を語らんがために、それに因果の理を付会しようとした態度が自ずと生んだ構成の立体化であろうか。巻四の一「恋ゆへころされて其女につきける事」が、浪人に仕える下郎の、主人の娘への恋を描いて、主人に討たれた怨念が怪異をなすという咄となり、五ノ一「きつねに契りし僧の事」は、題名その儘の、狐の化けた咄であり、六の一「神木を伐て罰あたり家ほろびし事」は、そのまま新加婢子の巻二の一〇の咄となる種のものである。片カナ本が、前述の通り、単に素材のみを提供したものであったのと較べて、これは同じ「新加婢子」に、

決して素材のみの提供とは言えぬ形での類似をあらわにしているのである。以下は省略に従うが、こうして平かな本の後半三巻、巻四から巻六までの各説話は、この編者の意図が、片カナ本の邪本呼ばわりに牽制されて、仏説を説こうとする正道の姿に立ち戻ろうとする所には全くなかった事を物語っているであり、巷間に散らばる奇異譚を、更に蒐集してこれを利用し、怪異小説流行の時流に積極的に投じようとしたものであることが考えられるのである。

以上の諸点から、因果物語が、近世文学の上に果たした役割は、単に仏教の摂理によって物の因果を説こうとした種のものではなく、鈴木正三の素志とはうらはらに、諸国物語系怪異小説に積極的に影響を与え、「一休諸国物語」との交渉をはじめとして、次期の仮名草子・浮世草子の怪異小説に多くの投影を与えたものと思われるのである。

注1 「鈴木正三全集」による。以下同。

- 2 「因果物語と一休諸国物語」(国文学論叢第六輯近世小説研究と資料所収) 参照。
- 3 「契沖に関する考察」(芸文研究、西脇順三郎先生記念論文集)
- 4 「仮名草子の説話性」(国語・国文一九九一年二月)
- 5 前記拙稿。
- 6 「『因果物語』の正本と邪本について——平仮名本と片仮名本との問題——」(文学論藻・斎藤清衛先生古稀記念号)
- 7 前記拙稿。
- 8 古典文庫の解題に「いきながらちごくを見てかへりし事」を巻三の第一四話としているのは巻五の第五話の誤りである。